



Vol.22

2015年7月21日

日本災害復興学会

# News letter

## 目次 -contents-

### 1 東京で今、あらためて果敢に復興を議論する

大会実行委員長 大矢根淳  
(専修大学人間科学部教授)

### 2 2015年度東京大会

### 3 日本災害復興学会に「日本学術会議協力学術研究団体」の称号

日本災害復興学会会長 中林一樹

### 4 各地の被災現場から 丹波市の復興への挑戦 丹波市副市長 鬼頭哲也

#### 新理事紹介

近藤民代・神戸大学大学院  
工学研究科准教授  
君嶋福芳・オールとちぎ

### 5 東北・若者通信

①【trees (福島県)】  
共同通信 所澤新一郎

#### 東日本大震災・復興レポート

①被災地と鉄道  
河北新報 須藤宣毅

### 6 消息

#### 現場から

「震災応援」、で終わらない  
拡がり  
花泉酒造 染谷亜紗子

※学会現況 (2015年7月1日)  
現在の会員 389  
正会員 345・学生会員 35  
購読会員 3・賛助会員 7

発行人 中林一樹  
TEL:0798-54-6996  
FAX:0798-54-6997  
http://f-gakkai.net/  
〒662-8501  
兵庫県西宮市上ヶ原一番町  
1番155号 関西学院大学災  
害復興制度研究所気付

## 東京で今、 あらためて果敢に復興を議論する

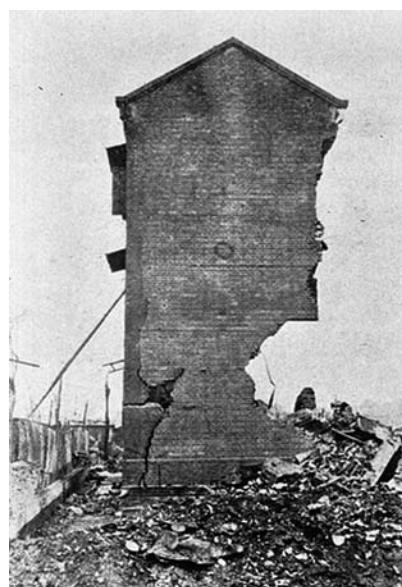
大会実行委員長 大矢根淳 (専修大学人間科学部教授)

災害に遭ってその生活を  
取り戻そうとの奮闘努力の  
過程で、従前居住地への住  
み戻りを切望する声は大き  
い。これがなかなか叶わな  
い現実、復興政策を批判的  
に検討する研究実践の蓄積  
は厚い。

一方で、なかなか進展を  
見ない現状に疲れ果て、最  
低限の命の維持費だけを手  
渡されて待たされ続ける、  
そうしたことがデフォルト  
として日常化してしまっ  
ているところから、沈思熟考  
の末、もう帰れないと理性  
的に判断するに至る層も  
また、そこにはある。ここに  
係る復興政策は、帰還意志  
を前提として組み上げられ  
ていることから、帰還を躊  
躇する層はますます追いつ  
められていく構造(生活再  
建の選択肢が用意されてい  
ない)となっている。

前者は阪神・淡路大震災  
20年の、後者は東日本大

震災・原発災害か  
らの断片的知見  
だ。昨年度、日本災  
害復興学会の長岡  
大会は、新潟県中  
越地震(2004年)  
の10年を期して  
企画された。今年  
2015年の東京大  
会は、阪神・淡路  
大震災20年の批  
判的再検討をベー  
スに、東日本大震  
災5年の現場に



適切に切り込みつつ、こ  
こであらためて、大都市東京  
で「復興」を考えてみたい。

今年度東京大会は、神田  
神保町にキャンパスを持つ  
専修大学で開催する。東  
大(赤門)、中大(白門)と並  
んで黒門(専大)と称して明  
治初期に開学した専修大  
学は、関東大震災で校舎が  
全壊し、「図書館の壁一枚」  
(写真)という瓦礫の中か  
ら教職員・学生が力を合わ

せて復興した歴史を持つ  
ていると、新入生に教え伝  
えられている。「復興」に  
そもそもゆかりのある大  
学で、また、東日本大震災  
では、同一法人校・石巻専  
修大学が被災地石巻市で、  
その被災対応の中核とな  
って貢献したことは、復興  
を究める学会の皆さまの  
記憶に新しいことと思う。

東京で果敢に復興を論じ  
ましょう。

# 2015 年度東京大会

## 9月26日・27日

### 専修大学神田キャンパスにて開催

#### 2015 東京大会 日程

9月 26日 (土)	午前	分科会①	分科会②
	午後①	分科会③	口頭発表①
	午後②	分科会④	口頭発表②
	夕方	全体会議 懇親会	
27日 (日)	午前	特別セッション	口頭発表③
	昼	ポスター発表	コアタイム
	午後	公開シンポジウム	

#### セッション／シンポジウム

分科会は4つ設けられる予定で、現在、分科会セッション企画を公募して、これを整理・調整しているところです。近日中に学会HPにて、分科会名称等を公表いたします。

学会開催両日に、口頭発表のセッションが設定されています。また、ポスター・セッションが2日目昼休みをコアに設定されています。この口頭発表、ポスター・セッションへの申込者は、大会時に販売配布される『大会予稿集』にその論文を投稿することができますので、学会HPをご覧ください8月10日(月)までにお申し込み下さい。

2日目午前に設定されている「特別セッション」は、「阪神・淡路大震災20年の経験をふまえた未来の災害復興への提言」と銘打ち、阪神・淡路大震災当時、当事者として震災復興に取り組んだ方々をお迎えし、未来の災害復興にむけて語っていただきます。

これを繋げる形で2日目午後には、「特別シンポジウム：首都直下地震からの東京の復興課題とそのあり方」を開催します。災害復興を、

##### ①基盤復興

(首都直下地震からの復興における基盤復興とは)

##### ②経済復興(地域の産業復興と個々の企業のBCP)

##### ③社会復興(復興における地域コミュニティの役割)

④生活復興(大都市における住まいの住宅確保シナリオ)の4つの視点から検討します。

時代とともに復興課題やそのあるべき方向性は変わってでしょう。次の時代は、人口減少・超高齢化、グローバリゼーションが更に展開し、帝都復興や戦災復興は言うに及ばず、20年前の阪神・淡路大震災とも異なるものとなることでしょう。さらに首都直下地震の場合、東京という都市の「特殊性」が復興に大きな影響を与えることになりそうです。首都直下地震からの東京の復興は、未知・未経験のものとなりえます。

本シンポジウムでは、阪神・淡路大震災の復興経験に裏付けられた提言と絡ませながら、来る首都直下地震からの首都東京の復興の課題とそのあり方について考えてみます。復興に不可欠な4次元として、基盤復興・経済復興・社会復興・生活復興に焦点をあてて論点提示を行い、会場参加型で議論を深めていきます。

#### 東京・復興まちあるきマップ

今年度の東京大会では、学会恒例のエクスカージョンは実施しないかわりに、過去の東京の震災・戦災を振り返るまちあるきに個々に繰り出していただくこととして、そのための詳細な案内マップをHP上にご紹介いたします。ご期待ください。

#### 参加費

参加費・予稿集代	3,000円
懇親会費	4,000円

※予稿集や懇親会の経費に応じて若干変更される可能性があります。

※大会参加者は各自で宿泊の手配をしてください。

#### 大会会場案内

会場：専修大学神田キャンパス

(千代田区神田神保町3-8)

##### ・水道橋駅(JR)

西口より徒歩7分

##### ・九段下駅(地下鉄/東西線、都営新宿線、半蔵門線)

出口5より徒歩3分

##### ・神保町駅(地下鉄/都営三田線、都営新宿線、半蔵門線)

出口A2より徒歩3分

# 日本災害復興学会に 「日本学術会議協力学術研究団体」の称号

日本災害復興学会会長 中林一樹

日本の科学者の内外に対する代表機関であり、科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させることを目的（日本学術会議法第2条）とする「日本学術会議」の会則第36条に、「日本学術会議協力学術研究団体」があります。

本学会がこの団体に申請することにした契機は、2013年度の大会を関西大学にお願いした際に、同団体である学術組織の大会であると、大学から別枠の開催支援が受けられるということからでした。同会議のHPでは「受付後概ね4～5か月後には文書でお知らせ」ということでしたので、事務局にお願いし、大会に間に合うように急いで申請しました。その9月には同会議からヒアリングするとの連絡を受け、副会長の皆さんらとともに同会議に伺い、本学会の目的や活動主旨を要約した資料などの追加提出を求められ、図1などを提出しました。その後の成り行きを待っていたのですが、待てど暮らせど音沙汰なしでした。

そして、2015年3月末日に、突然資料が返送されてきました。何事かと驚き、事情と経過の説明を同会議

事務局に強く申し入れました。十分な説明がないまま、紆余曲折しましたが、ようやく同年5月22日付で「日本学術会議協力学術研究団体の称号の付与」（同会議は「指定」と略称）の通知を受け取りました。

それは、日本災害復興学会を、①学術研究の向上発達を図ることを目的とし、②研究者の自主的集まりで研究者自身で運営され、③構成員が100人以上でその半数以上が研究者で、④役員も半数以上が構成員の研究者で、⑤学術機関誌を年1回以上継続的に発行している『学術研究団体』と認めたということです。な

お同会議によると、研究者とは「人文・社会科学から自然科学までを包含するすべての学術分野で、新たな知識を生み出す活動あるいは科学的な知識の利用及び活用に従事する者」として

います。本学会は、日本学術会議と協力関係を持ち、求めに応じて学術会議の活動に協力し、学術会議の会員または連携会員の候補者の情報を提供することができる「科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させる活動をしている団体」と認定されたということですが、我々の活動とその目的には

何ら変化はありません。これからも、被災者、被災地にとって、より良い災害復興の実現を目指して、学術研究の向上発達と、実践的な復興支援や推進に取り組んでいきます。

日本災害復興学会は、「災害復興学の確立と研究の向上に努めるとともに、被災体験の継承・被災地支援の交流をはかり、被災地の再建、被災者の再起に資することを目的として設立した」のですから、その目的を果たすためにすべての会員がそれぞれの立場で活動していきます。災害復興に取り組む必要がなくなる、その日まで。

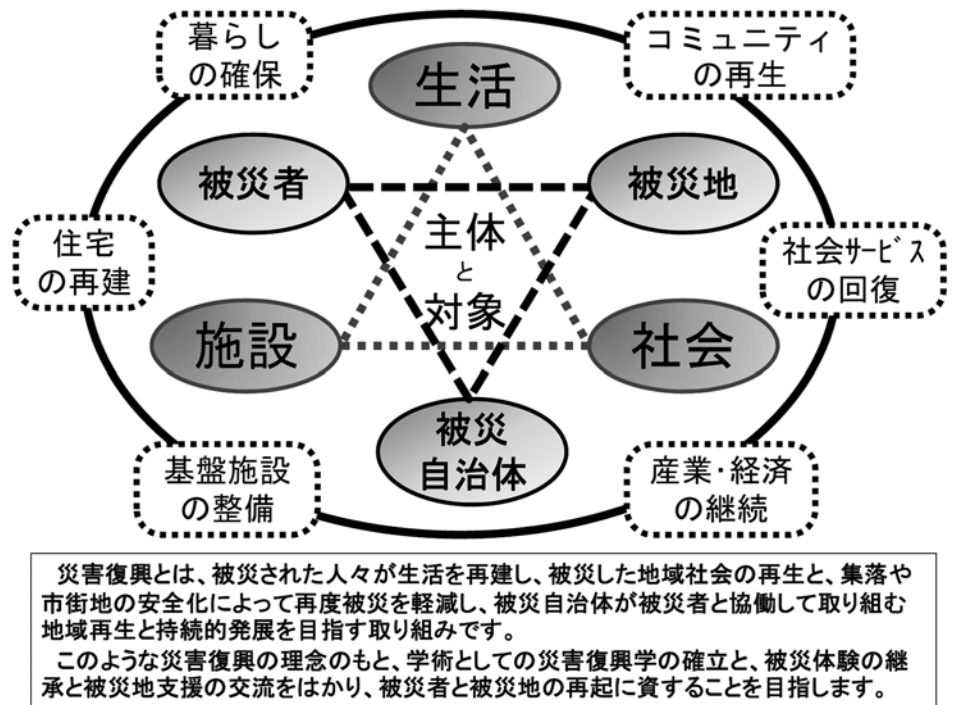


図1 日本災害復興学会の目的と活動の主旨－復興の主体と対象－（申請時の追加提出資料から）

# 丹波市の復興への挑戦 ～持続性ある活力社会を目指して～

丹波市副市長 鬼頭哲也

## ■災害の概要

丹波市では、2014年8月16日から17日にかけて、市内東北部の市島地域を中心に局所的な集中豪雨となりました。雨量は多いところで、1時間91mm、24時間雨量で414mmを観測しました。この集中豪雨により、死者1人を含む人的被害5名、住家被害1,023戸（うち半壊以上の被害69戸）の甚大な被害となりました。

## ■被害の特徴

丹波市を襲ったこの災害では、人家に影響を及ぼす土砂災害が104カ所にも及び、その土砂流出量は64万m<sup>3</sup>と推定されており、同時期に発生した広島市での災害の土砂流出量を超えるといわれています。この災害の特徴は、概ね次のよ

うなことがいえます。

- ・高齢化率が30%を超え、この10年間で約1割の人口が減少する高齢・縮小化する中山間地域で起こった災害
- ・里山として昔から人々に恩恵を与えてきた森林、そして地域の基礎的な産業である農業を直撃した災害
- ・持ち家率が高く（86%）、1住宅当たりの延べ床面積も広い（164m<sup>2</sup>）住環境の地域を襲った災害

## ■復興プランの策定

丹波市では、過去に経験のない大災害からの復興に向けて、市民が目指すべき地域の将来像を共有し、一丸となって力を結集していくため、「丹波市復興プラン」を2015年3月に策定しました。

この復興プランでいくつ



集中豪雨の被害を受けた丹波市の集落（提供：兵庫県消防防災航空隊）

かこだわったことがあります。一つ目は、復興を定義し、目指す将来像を明らかにしたことです。災害前の「復旧」を進めたとしても、高齡・縮小化する中山間地域の丹波市では、地域の衰退や疲弊の進行を止めることはできません。丹波市では、この復興プランの中で、単に元の状態に戻すのではなく、持続性のある活力社会の創造を目指すことを明らかにしました。二つ目は、復興度合の指標を量ではなく質に求めたことです。人口や生産量が減っても、そこに住む人々の質的満足度

が上昇するような社会の創造を目指すべきと考えたからです。三つ目は、取組の分野を総花的にせず、重点5分野に絞り、かつ先導的な取組だけを上げたことです。「余裕域（バッファゾーン）の設置」などは、そうした考えから出てきたものです。

丹波市のような中山間地域は、国土の7割を占めます。丹波市での復興の取り組みはそうした地域での参考になるだろうと思います。全国からのご支援への感謝の意味も込めて、モデルとなるような取り組みを進めたいと思います。

## 新理事紹介



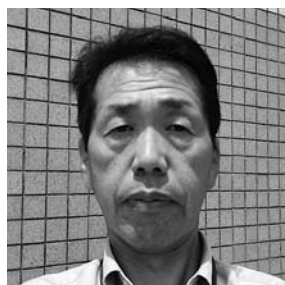
近藤民代・神戸大学大学院  
工学研究科准教授

広域巨大災害における住宅復興をテーマに研究をし

ています。主なフィールドは米国ハリケーンカトリーナと東日本大震災の被災市街地です。復興学会には実務者、メディア、自治体職員、研究者など幅広いメンバーがそろっており、そこに魅力を感じます。復興を切り口にした学術コミュニティは世界中に存在しています。新理事として国内外ネットワーク形成に取り組む、英知を集めて、災害復

興学の発展に貢献したいと考えています。

\* \* \*



君嶋福芳・オールとちぎ

那須水害を契機に災害ボランティアとして活動して

まいりました。現在は、福島からの広域避難者支援を中心に活動していますが、全世帯訪問活動を展開するに際し、黒田裕子さんに幾度か栃木までご足労いただき、具体的なノウハウをご教示いただきました。おかげさまで多くのケースで重篤な状態に至らずにすみました。今後も被災者の方に寄り添えるよう活動したいと思っています。



# 東北若者通信

## ① trees (福島県)

共同通信 所澤新一郎

福島県沿岸の高校生グループ「trees (トゥリーズ)」が年4回、地元の逸品を詰め合わせた「そうまうま定期便」を全国に送り続けている。

協力してくれる店主や農家などを手分けして発掘し、お菓子やいちごジャム、水産加工品などを発送。生産者らの思いを取材した手紙を添える。

「地元の大人の温かさを伝えたくて、あえて手書きにしています」と、グループ立ち上げに尽力した門馬

千紗さん。

2013年夏、ソフトバンクの復興支援による米国短期留学に門馬さんたちが参加し「福島のために何かしたい」と話し合った。グループ名に「木の根っこのように地元根付き、枝葉のように相双地区の発信を広げたい」と思いを込めた。

「地域のいろんな大人とつながることができた。こんなに美味しいお米があることも活動がなければ知らなかった」と相馬東高3年の飯島楓さん。将来は「地



元のために仕事をしたい」という。

相馬高3年の小泉結佳さんは「自分の中で何か変化を起こしたい」と参加した。福島を食べ物を敬遠する人がいる一方で、製品の送り先から届く「とてもおいしい」との反響。「二つの見方を持てるようになった」協力した店舗から「高校

生に元気をもらった」と感謝されることも多い。

相馬高3年の里佳純さんは「原発事故後の大人の努力や葛藤を知ってほしい。私たちだからこそできる取り組み」と語る。

\* \* \*

東日本大震災を機にさまざまな活動を始めた若い世代をシリーズで取り上げます。

## 東日本大震災・復興レポート

### ①被災地と鉄道

河北新報 須藤宣毅

東日本大震災で大きな津波被害を受けた被災地の鉄道に5月末～6月上旬、対照的な動きがあった。

JR仙石線で休止していた高城町(宮城県松島町)―陸前小野(宮城県東松島市)間が5月30日、運転を再開し、4年2カ月ぶりにおおば通(仙台市)―石巻間を直通電車が走った。

当日は主な駅で記念式典が開かれた。交通網は人の動脈に例えられるが、開通を祝う人々の表情は、復興への血潮を感じさせた。

開通区間のうち、東名(とよな)、野蒜(のびる)の両駅はかつて海岸から続く平地にあり、震災の津波でがれきや土砂に埋もれた。東松島市の防災集団移転団地整備に合わせて、線路も駅も内陸の高台に移った。

両駅の周辺では、ダンプカーが土砂を運び、ロードローラーが地面を固める。今後、住宅、公共施設の建設が本格化する。2016年夏に宅地の引き渡しが始まり、駅を中心に復興を象徴する街が生まれる。



JR仙石線が全線で運行を再開し、利用客らで混雑する野蒜駅のホーム＝5月30日

一方でJR気仙沼線と大船渡線は、鉄道復旧に暗雲が立ちこめる。両線の復旧費は計1,100億円。国は6月5日、国費投入に否定的な考えを表明し、JR東日本は6月9日、全額負担は困難との見解を示した。自治体は鉄道の早期復旧

を望むが、両線は赤字路線で、震災後に導入したバス高速輸送システム(BRT)が定着しつつある。

鉄道の断念か、BRTの継続か、それとも…。定まらない復旧方針は、沿線地域でまちづくりの議論の停滞を招いている。

# 消息

◆入会 = カッコ内は所属。  
敬称略。

正会員▽岩倉 哲二▽竹田 彰  
(奥尻島津波語りべ隊)▽大野 克美(Ｉ・Ｔ・Ｏ(株)常勤顧問)▽永見 光三((独)国際協力機構 東北支部 企画役(エキスパート職))▽松木 優子  
▽倉本 義之(第一東京弁護士会 弁護士)▽吉江 暢洋(川上・吉江法律事務所 弁護士)  
▽二宮 淳悟(新潟合同法律事務所 弁護士)▽佐藤 英樹(佐藤英樹法律事務所 弁護士)▽今田 健太郎(弁護士法人あすか 弁護士)▽岩田 克一▽堀井 秀知(浅田法律事務所 弁護士・防災士)学生会員▽大津山 堅介(京都大学大学院

地球環境学舎 環境マネジメント専攻 環境教育論分野 修士課程 2 回生)▽吉田 祐也(東北大学 大学院 経済学研究科 経済経営リサーチコース 修士課程前期 2 年)▽大内 斎之(新潟大学大学院 現代社会文化研究科 博士後期課程)▽乾 陽亮(大阪大学大学院 人間科学研究科 渥美研究室)▽菊池 遼(東北大学大学院 経済学研究科 博士後期課程)

◆異動 = 新所属(旧所属は、前年度会員登録時)名前。

▽静岡大学 防災総合センター 教授(静岡県 危機管理監)岩田 孝仁▽関西学院大学 災害復興制度研究所 教授(朝日新聞社 社会部 災害専門記者)野呂 雅之▽(公社)中越防災安全推進機構 震災アーカイブス・メモリアルセンターセンター長((公社)中越防災安全推進機構 復興デザインセンター センター長)稲垣 文彦▽(公財) ひょうご震災

記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター 研究部 研究員(神戸大学大学院 工学研究科 博士後期課程)荒木 裕子▽神戸新聞社 報道部 専門編集委員(神戸新聞社 社会部 編集委員)磯辺 康子▽横浜市立大学 国際総合科学部 国際都市学系 まちづくりコース 准教授(千葉大学 コミュニティ再生ケアセンター 特任准教授)石川 永子▽愛媛大学 社会共創学部設置準備室 准教授((公財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター 研究員)渡邊 敬逸▽(公財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター 研究員(大阪府立大学 地域連携研究機構 特任助教)石原 凌河▽(公財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター 研究員(日本大学 理工学部 海洋建築工学科 准教授)坪井 望太郎▽徳島大

学大学院 医歯薬学研究部 法医学分野 教授(徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部 感覚運動系病態医学講座 法医学分野 教授)西村 明儒▽兵庫県立大学 防災教育研究センター 専任講師(京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 特定研究員)宮本 匠▽名城大学 都市情報学部 教授(名城大学 都市情報学部)柄谷 友香▽大日本コンサルタント(株)復興防災推進部 復興防災計画室 係長(大日本コンサルタント(株)社会創造技術部 社会政策プロジェクト室 主任)松ノ木 祐一▽清水建設(株)技術研究所 社会システム技術センター まちづくりグループ長(清水建設(株)技術研究所 高度空間技術センター 研究員)村田 明子▽東北福祉大学 感性福祉研究所 特任研究員(東北福祉大学大学院 博士課程)渡邊 圭

## 現場から from the Spot

6月14日、私の住む福島県南会津町の南郷地域に全国から1,100人を超えるライダーが集まった。開催4年目となる「ひめさゆりバイクミーティング」が開かれたため、車での来場を含むとその数1,300人。午前中全国的に大雨に見舞われたにも関わらず、人口2千人足らずの地域にその半数を超える人が訪れたことになる。

福島県は震災後、県内各

## 「震災応援」、で終わらない拡がり

花泉酒造 染谷亜紗子

所に散らばるバイク愛好家たちと共に風評被害対策と誘客による復興を目指して「ライダーを呼び込む」取り組みを始めた。県内14の休憩所「ライダーズピット」を設け、特典を用意したり、スタンプラリーを企画。花泉酒造もその1つで文字通り日々ライダーが絶えない。電車やバスなどの二次交通が不便な場所も多い福島県だが、逆に「遠い道のり」をこそ楽しむライ

ダーに目を付けたのが功を奏した。

震災直後は「福島を応援しよう！」という思いで彼らは集った。だが今では純粹に「福島が好き」「南郷が好き」という理由で足繁く通ってくれる。

観光などの視点で復興を見た場合、「復興のため」「応援のため」という理由を超え、本来持っていた価値を

再び認めてもらう域に戻るかどうか、むしろ本来の価値を超えるかどうかが欠かせない。「復興を」「応援を」と言って旗を掲げたものの、1、2年で衰退した取り組みや去った人は数多くいる。観光だけではない。福島県産の農作物の購買も何もかも、確かにきっかけは「応援」で構わない。だがそれだけで終わらない関係作りがこの先ますます双方に求められると感じている。

「ふくしまRider'sナビ」

<http://www.tif.ne.jp/riders/>

※「消息」は7月1日現在学会事務局提出分。